

# 新『教会通信』(2019年9月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、  
汝等をして志望をたて、業を行わしめ給へばなり。』  
(ピリピ書第2章13節)

此処での『神の御意』とは一体何なのか?

即答に迷いますが、新・旧約聖書に記された時代も進み、神の成さんとしておられた預言、例えば西暦七十年のイスラエル国の滅亡と1878年間にも亘るユダヤ民族の流浪の歴史は終了し、イスラエル国の再建は1948年5月14日に国連に於いて承認され成就しましたし、その後、世界中に離散しておりましたユダヤ民族は日に日に母国であるイスラエルの山々の地に帰還しております。(エゼキエル28:25,26 テサロニケ前5:3等参照)

聖書に記載されております末の世として描かれた様相も、今日の世相を詳らかに観ておりますと、イエスの聖名を冒す不届きな偽預言者と偽キリスト教会が多数出現しておりますし、此に来て世界政治の流れが大きく変化し、戦後の我が国民には住み慣れた民主主義が怪しい動きを見せており、それに連れて個々人の“愛”その物も冷ややかに成りつつあります。

また地球を壊滅して仕舞う核戦争にしても、何時、勃発したとしても不思議ではない火種が世界の其処彼処に点在しております。

ブラジルを主とする熱帯雨林の火災が大きな問題と成っております。

報道に依ると、今年だけで8万件の発火があり、先月後期現在、大きいので四国全土に相当する大火災が起こっており、処置無しの状態とか。

此の一带の熱帯雨林から生まれる酸素の量は世界中の20%に相当しているとか、此の地域の樹木が全滅したら、大変な事態が生じます。

地球温暖化が表面化して、気象学者間では百年間に摂氏2度程度の気温上昇があると言われていましたが、何と2018年度はその前年の2017年度からのたった一年の間に全世界平均で1℃余の上昇があったとか。

このような現実と向き合っておりますと、今、私たちの前に肅然と立ちほだかつて参りますのは、主イエス様のご再臨であります。

天の父なる神様と御イエス様とが共通のご意志を以て、罪と咎に塗れた人類救済の為に十字架の御業を成し遂げて下さいましたのは、神様が如何に我ら人間を愛しておられるか、

その御業を通して知らしめて下さったのであります。

地上に顕現下さった主イエス様を神の独児と信じ、その主が仰った

◎『人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず』

(ヨハネ傳第3章5節)

との聖言に従って、正しいバプテスマを賜った者には神の子としての身分が与えられ、永遠に神と共に生きる為の約束の契約が、世界の彼方此方で日々になされている現在であります。

冒頭の聖言を、再確認させて戴きます。

◎『神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき』

神様は、これから成さろうとしておられる御意を完璧に成就なされる為に、我ら“水と霊”の御救いに与っている者の衷に強く働き掛けておられます。

◎『汝等をして志望をたて、業を行わしめ給えり』

神からの強権的なご命令や働き掛けを受けたからでは無く、私たち自身の真心からの志として、積極的に主の御再臨の為に必要な働きをさせて戴く事を表しております。

我らは神の家族の一員として永遠に生きる事が、神様との間で約束されており、御再臨は、その約束成就の第一歩であり、始まりであります。

私たち真の御救いに与っている者には、世間の誰もが恐怖として捉えている“死”に依る脅迫概念は、もうありません。

此の地上に生を受けた者は皆、サタン(悪魔)が吹聴して廻る“死”を以て脅迫されて、サタンの悪巧みの中に落ち込んで参ります。

つまり、死の恐怖から遁れようと、巧妙なサタンが音頭を取る数多の偶像教に誘惑されて、挙げ句に第二の死である“ゲヘナ”に悪魔と一緒に放り込まれ、其処では、誰もが未体験の絶大なる苦痛の為に死にたいと願っても死ぬ事すら赦されない苦しみが未来永劫に続きます。

重ねて申しますが“水と霊”の御救いに与り主イエス様と死を偕にした我らは、神様と共に永遠に生きる事に成りました。しかしその為には、善き備えを致さねばならない事も聖書には記されております。

大先輩であり神に愛される使徒パウロは、コロサイ書第1章24節で

◎『キリストの躰なる教会のために、

我が身をもてキリストの患難の欠けたるを補う。』

“キリストの患難の欠けたる”とは、一体何の事でありましょう？

ご召天なされた主イエス様は、現在、神の右の御座に着いておられ、二千年の昔のように、主ご自身が直接、唯一神なる神の福音を地上の者に語る事はお出来になりません。

地上でのキリストの躰なる教会の完成が、主のご再臨の時であります。

つまり、異邦人の御救いに与る数が満ちた時、主はご再臨なされます。

神の教会が完成し、異邦人に定められた御救いに与る者の数が満たされる其の日まで、主様ご自身が此の地上の者達に伝道なされる事は出来ませんので、その患難の欠けたるを

おぎな 補うのは使徒パウロが言われる如くに、現代、其の意を継ぐのは私たちの務めであり使命  
しめい  
であります。

“水と霊”のバプテスマにあずか 与ったのだから、もう神の子である事は確定しており、これ  
べつだん 以上、別段何もする必要は無い、下手に動いて神の御意に逆らうような事があってはならない、  
へ た みこころ さか と思うか、それとも一人でも多くの者が御救いに 与る為にも愚かな自分も福音伝道の  
あずか 為に用いて戴きたい、と願うか、どちらが神の子に相応しいかは考える迄もありますまい。

マタイ傳第25章14節以降に、『タラント』なる高額な通貨の単位が出ており、或る主人が暫  
しば しば  
し旅に出るに当たってその 僕達に、各人の持てる能力に応じて額の異なる資本金を与え、  
しもべ ちから がく  
これを元手にして増やすように、と言い置いて旅立ちます。

時が経って主人の帰着後、直ちに誰が如何ほどに増やしたか計算が始まりましたが、それ  
た か ふ なりに働いた者達からは相応の増えた額が報告されました。その者達に対して、主人はこう  
そうおう ふ 言いました。

◎『宜いかな、善かつ 忠なる 僕、なんじは僅かなる物に忠なりき。』

我なんじに多くの物を 掌 どころせん、汝の主人の 歡喜に入れ』

(マタイ傳第25章21節等)

しかし唯一人、委ねられていた資本を全く用いる事なく、そのままを主人にお返しした  
ただひとり ゆだ もち 者がおりました。

彼の言い分はこうでした。『ご主人様、貴方様は大変にお厳しいお人であり、もしも、元  
あなたさま きび  
金を減らすような事にでもなったらと思うと懼ろしくなって、土の中に埋めて置きました。  
へ  
此の通り、 与った物をその儘お返し致します。』

ご主人様は、激しくお怒りになりました。

『悪しくかつ 悔れる 僕、もしもそうであったら、自分のタラントを銀行に預けて利子で  
おこた しもべ  
も稼げば良かった事になる、此の役立たずを真っ暗闇の外に叩き出せ、其処にて泣き喚いて  
かせ  
悔しがっても、もう後の祭りだがね。』

此のご主人は、僕たちに対して決して無理難題を吹っ掛けて困らせようと為さったので  
しもべ なんだい な  
は無く、各人の持てる能力を考慮の上で、その気に成ってやる気さえあったら誰にでも苦も  
ちから こうりよ く  
無くやれる 範囲の仕事を与えて旅立ったのであります。

或る線をクリアした者達に仰有った、『汝は僅かなる物に 忠なりき』とのお言葉の中に、  
おつしや わず ちゆう  
ご主人の御意が 窺えます。

『善かつ忠なる 僕、あなたは僅かなる事に忠実であった』と言っておられますが、是は、  
しもべ わず これ  
誰にでも其の気持ちさえあれば、容易に達成出来る事である、とご主人が仰有っておいでな  
ようい たつせい  
のです。

使徒パウロはロマ書第1章16節に◎『我は福音を恥とせず』と言っており、裏を反せば、  
うら かせ  
確かに恥辱を感じる事も有るかと思われまます。

しかし、一度、声を出して語り始めてみて下さい。

主イエス様が伴<sup>ともな</sup>って下さ<sup>くだ</sup>っておられる事が明確<sup>めいかく</sup>に解<sup>と</sup>って参ります。  
福音を語る事は楽しい事であり、必ず恵まれて参ります。

さて、【水と霊】のバプテスマを戴いた総ての者が百パーセント神の子であり、また王たる祭司としての身分が保証されているのか？

そうとは断言出来ないと思われる聖言<sup>みことば</sup>が、上記、“キリストの患難<sup>なやみ</sup>の欠けたるを補<sup>おぎな</sup>う”や“タラント”等の趣意<sup>しゆい</sup>する処や、御霊<sup>みたま</sup>を瀆<sup>けが</sup>す者は此の世<sup>のち</sup>にても後の世<sup>のち</sup>にても赦<sup>ゆる</sup>さない、とはマタイ・マルコ・ルカの各所に記されており、また外に、前の教会通信7月号の最後部に記したピリピ書第3章13, 14節の聖言<sup>みことば</sup>にも強く窺<sup>うかが</sup>えます。

聖言<sup>みことば</sup>を記して置きます。

◎『兄弟よ、われ既に捉<sup>すで</sup>えたりと思わず、唯<sup>ただ</sup>この一事<sup>いちじ</sup>を務<sup>つと</sup>む、  
即ち後<sup>すなわ</sup>のものを忘れ、前<sup>うしろ</sup>のものに向いて励<sup>はげ</sup>み、標準<sup>めあて</sup>を指して進み、  
神のキリスト・イエスに由<sup>よ</sup>りて上<sup>め</sup>に召<sup>めし</sup>したまう召<sup>めし</sup>に関わる褒美<sup>ほうび</sup>を  
得<sup>え</sup>んとて之<sup>これ</sup>を追<sup>お</sup>い求<sup>もと</sup>む。』

此の『上に召<sup>めし</sup>したまう召<sup>めし</sup>に関わる褒美』とは、聖書に記されている以上、必ず存在する信仰者にとって大切な物である事に間違いありません。

御霊<sup>みたま</sup>を瀆<sup>けが</sup>す罪<sup>つみ</sup>以外、【水と霊】のバプテスマを賜<sup>たまわ</sup>った者には、永遠<sup>とこしえ</sup>の生命<sup>いのち</sup>が約束されている事は、確かに疑<sup>う</sup>う余地もありません。

一段<sup>へりくだ</sup>遜<sup>ひ</sup>って“神の子”たる身分や“王たる祭司<sup>さいし</sup>”なる身分<sup>かな</sup>が適<sup>あ</sup>えられない迄も、神の国<sup>とこしえ</sup>に永遠<sup>とこしえ</sup>に生きる約束は不動であると思えます。

神を知る事の無<sup>な</sup>かった者や、神を信じようとしな<sup>し</sup>なかった者にも、其の死後<sup>しご</sup>身代わり洗<sup>み</sup>礼<sup>が</sup>の機会<sup>が</sup>が与<sup>あ</sup>えられており、不公平とも思える不信仰者に神の国<sup>とこしえ</sup>での永世<sup>えいせい</sup>が与<sup>あ</sup>えられている事を鑑<sup>かん</sup>みますと、“水と霊”に与<sup>あ</sup>った者の中で主の聖霊<sup>あずか</sup>を瀆<sup>けが</sup>した者の罪<sup>つみ</sup>は赦<sup>ゆる</sup>されないとして、他の者は総て神の国に住まわ<sup>す</sup>せて戴<sup>か</sup>けるのではないかと思われま<sup>す</sup>。

例えば天使のような存在として、或いは旧・新約聖書に記される“門守<sup>かどもり</sup>”（門番<sup>もんばん</sup>）のような細分化<sup>さいぶんか</sup>された多数の職分<sup>しご</sup>を以<sup>も</sup>て永住権<sup>えいじゆけん</sup>が与<sup>あ</sup>えられるのかとも思われま<sup>す</sup>。

上記ピリピ書の聖言<sup>みことば</sup>も、“唯<sup>ただ</sup>この一事<sup>いちじ</sup>を務<sup>つと</sup>む”とは、過ぎ去<sup>や</sup>った過去<sup>かこ</sup>の事はどうでも良く、要<sup>よう</sup>は是<sup>こ</sup>れから“大切な褒美<sup>ほうび</sup>を戴<sup>か</sup>く為<sup>ため</sup>に追<sup>お</sup>い求<sup>もと</sup>める”その行<sup>は</sup>た<sup>ら</sup>き<sup>が</sup>が、どうやら“上<sup>め</sup>に召<sup>めし</sup>したまう召<sup>めし</sup>に関わる”重大な要素<sup>ふくむ</sup>を含有<sup>ふくむ</sup>ものであるらしく、私達にはそれが何であるか知る事が急務<sup>きゆうむ</sup>と思われま<sup>す</sup>。

真<sup>ま</sup>っ先に思<sup>おも</sup>い浮<sup>う</sup>かぶ事、そして、それ以外には無いと確信<sup>かくしん</sup>が持<sup>も</sup>てる主イエス様ご自身<sup>ご</sup>が語<sup>かた</sup>られた聖言<sup>みことば</sup>があります。

それは、現代に活<sup>い</sup>きる我<sup>われ</sup>らに取<sup>と</sup>って大<sup>お</sup>変<sup>へん</sup>に重<sup>じゆう</sup>要<sup>よう</sup>な聖言<sup>みことば</sup>であり、主<sup>き</sup>が最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の晩餐<sup>ばんさん</sup>の席<sup>おつしや</sup>で仰<sup>おほ</sup>有<sup>り</sup>ったヨハネ傳<sup>でん</sup>第13章34節の聖言<sup>みことば</sup>であります。

◎『われ新<sup>いましめ</sup>しき誠命<sup>まこと</sup>を汝<sup>なん</sup>らに与<sup>あ</sup>う。なんじら相<sup>あ</sup>愛<sup>あい</sup>すべし。  
わが汝<sup>なん</sup>らを愛<sup>あい</sup>せしごとく、汝<sup>なん</sup>らも相<sup>あ</sup>愛<sup>あい</sup>すべし。』

主が御口を以て語られる“愛”とは、私達が日常的に口にする“愛”と全く重みを異にするものであります。

神が語られる“愛”とは、被造物に過ぎない人間の罪を贖う為に、十字架に釘打たれて生命が尽きるまでお痛みとお苦しみと恥辱しめとに耐えて勝利された事を以て“愛”の定義となされておられます。

つまり、測り得べからざる唯一神のお生命を以て、私(我ら)如き卑小な者に永遠の生命を与えようと、あの十字架に於ける生贄の刑罰を甘んじて受けて下さったその御業を“愛”と表現しておられます。

『我が汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし』とは、我ら人間同士、互いに永遠の生命を懸けて、主イエス様が為された如くに、『神の国・永遠の生命』に付いての福音を証明して行く事を示唆しております。

福音を語る者を通して、一人でも多くの者が『神の国・永遠の生命』に与る事を、神は今、我らに使命として与えておられます。

そして此の聖言に密着した聖言を、ヨハネ第一の書第3章の中に詳細に記されております。抽出しておきます。

◎『おおよそ義を行わぬ者および己が兄弟を愛せぬ者は  
神より出づるにあらず。

我ら互いに相愛すべきは汝らが初めより聞きし音信なり。』

(ヨハネ第一の書第3章10節後半及び11節)

◎『おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、

凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。

主は我らの為に生命を捨てたまえり、

之によりて愛と言う事を知りたり、

我等もまた兄弟の為に生命を捨つべきなり。』

(ヨハネ第一の書第3章15, 16節)

今の時代に、主の十字架に由って開かれた【水と霊】の御救いを賜る我らは、世界の中で最も恵まれ祝福された者達であります。

神の国へと進み、神と共に永遠を共有し、神の家族の一員と成って、父なる神の治め給う全宇宙を奔放に動き廻る特権が与えられております。

此の物凄い特権を、一人でも多くの者に知らしめるべきであります。

なかなか福音を語る事が出来ないと思っている者、又そう口にする者がおりますが、やってみようと思わなければ、“タラント”を土に穴を掘って埋めておいた者と一緒であります。

自分のような者の為に、お生命を捨ててまでして永遠の生命を与えて下さった主イエス・キリスト様が、今、自分のような者に最高の名誉でもある神の国を紹介する御用を与えて下さっておられるのです。

◎『なんじら己が為に財寶を天に積み』(マタイ傳第6章20節)とありますが、此の事は、取りも直さず天国に財寶を積む事になるのです。

福音伝道を心に願ひ、その事を神様に真心を以て禱り、願ひ、また禱っておりますと、やがて変化が現れて参ります。神様が働いて下さいます。

◎『我らが神に向かいて確信する所は是なり、

即ち御意にかなう事を求めば、必ず聴き給う。

かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、

求めし願ひを得たる事をも知るなり。』

(ヨハネ第一の書第5章14, 15節)

主の御心に適う事を求めれば、主は必ず聴いて適えて下さいます。

愛する兄弟・姉妹、牧師は恒に信者方の事を想ひ、日に幾度か禱りをお献げしておりますが、中でも夕刻の祈禱の折、信者方の御家族が挙って夕餉の感謝のお祈りを献げる事が出来るように、と祈らされております。

真の御救いに与っている者の家族が空中再臨の折、其の中で誰か一人でも空中へと携挙されなかったとしたら、どうでしょう？

家族全員が救われていて、全員が揃う食卓を囲んで感謝のお祈りが成される御全家の、何と素晴らしい光景ではありませんか？

福音は先ずは、身近な者から始められると幸いであります。

教会通信前号でも申しましたが、福音を語ろうとする者は、普段の生活態度が肝要で、世の人々は、貴方の普段の一挙一動を観ております。

福音を語る貴方に、信頼が置けるか否か、世の者は語られる福音の内容に先立って判断致します。

教会が、神の国の大使館の働きをする処ならば、信者である我ら一人びとりは、神の国の外交官であります。

我等には、神の真の言を委ねられた誇り高き大使や使節に相当する身分が与えられており、忠実にその任務を成し遂げた者には、『召しに関わる褒美』が堆く積まれているに違いありません。

(因みに、コリント後書第5章20節やエペソ書第6章20節に出て参ります“使者”のキングジェイムス版英語聖書では“アンバサダー”つまり“大使”が使われております。)

此の信じられない程の重要な特命を、神様から与えられている私たちは、地上に顕現なされた主様に父なる神様が後ろ盾と成っておられたように、私たちには主の御霊様が後ろ盾と成って恒に行動を共にして下さり、奇蹟を以て聖書に記された聖言が本物であることを証明して下さい。(此の事、マルコ傳第16章20節の聖言をご参照あれ)

人には皆、楽をして楽しく生きる人生に期待を寄せている処があり、その事を適える為に偶像信仰している者も居るやに聞き及びますが、永遠を神と偕に生きる我らには肉的な我を自制して神の御意に添った途を心懸ける事は、絶対に必要であります。使徒パウロは、こう言っております。

◎『我キリストと偕に十字架につけられたり。

最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。

今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために

己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。』

(ガラテヤ書第2章20, 21節)

大先輩のパウロと同じ主の御霊を戴く我らも、やがて天にて神の御前に高く積み重ねられた財寶と共に、“王たる祭司”としての身分に恥じない為の七種類の冠も用意されております。

天国に自分の財寶も冠も無かったら……、思うだけでゾッと致します。

今の“聖霊時代・御救いの時代”は短い期間で、瞬く間に終了します。

◎『汝らの身は、その中にある神より受けたる聖霊の宮にして、

汝らは己の者にあらざるを知らぬか。汝らは價をもて

買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。』

(コリント前書第6章19, 20節)

(2019・9・1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)